



Title	中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 69, p. 57-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81051
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機

米 山 喜 晟

Montaperti e Benevento —Il tempo e i motivi del decollo della produttività intellettuale di Firenze medievale —

Y. YONEYAMA

Cap. I Esaminati gli scrittori scelti in un dizionario della letteratura italiano pubblicato in America (Connecticut 1979), ci fa meravigliare di nuovo, l'alta percentuale delle età medievale e rinascimentale degli scrittori che ebbero relazioni particolari con Firenze come origine o dimora. Possiamo confermare questa meraviglia con i risultati degli studi statistici di Antonelli e Bianchini e di C. Bec. Con lo studio di Bec, possiamo conoscere che Firenze continuò di essere la prima come produttrice intellettuale fra tutte le città italiane dall'inizio del XIV alla metà del XVI secolo, e con quello di Antonelli e Bianchini possiamo presumere che questo primato di Firenze cominciò al terzo quarto periodo (1260–1280) del XIII secolo. Mi pare che sia molto importante spiegare perché in questo periodo cominciò questo primato e anche perché il primato si poté mantenere così a lungo. Come proponente di questo problema, vorrei tentare una spiegazione provvisoria.

Cap. II Credo che sia impossibile spiegare questo fenomeno senza considerare le due battaglie più importanti in questo periodo, cioè di Montaperti e di Benevento. Nella Storia di Firenze di Davidsohn, la guerra di Montaperti è descritta alla fine di una serie di guerre promosse dal Primo Popolo per conquistare le città intorno a Firenze, nel capitolo intitolato “il Popolo vittorioso”. Credo che questo giudizio di Davidsohn sia vero e suggestivo. La forza principale che promosse la guerra fu la volontà o piuttosto l'avarizia del Popolo battagliero che volesse conquistare o saccheggiare la città prossima. In questa età, le ricchezze conquistate o saccheggiate con guerre erano importanti e il Villani e anche il Marchionne spiegano l'inizio del conio dei fiorini d'oro come un risultato della vittoria di una serie di guerre. Il Farinata approfittò questa indole battagliera del Popolo e vinse completamente i guelfi toscani con l'aiuto dei senesi e dei cavalieri tedeschi. Secondo il Villani, i morti e i prigionieri di Montaperti furono composti principalmente dei migliori del Popolo e i sacrifici dei nobili furono pochissimi. Dopo la sconfitta, i fuorusciti fiorentini dovettero lasciare Lucca, l'ultima base in Toscana, ma il Villani riconosce questa uscita

da Toscana come la “cagione di loro ricchezza”. Mi pare che quest’opinione sia molto informativa, perché testimonia il cambiamento radicale della mentalità fiorentina, cioè allontanamento dalle armi. S’intende c’erano alcune eccezioni, ma la maggioranza del Popolo cercò qualche mezzo di vivere più pacifico, il che portò il successo economico che ci informa il Villani. Credo che questo cambiamento della mentalità influenzò più generalmente e diventò il primo incitamento all’attività intellettuale. Dopo sei anni il re Manfredi fu vinto dal nuovo re Carlo d’Angiò a Benevento. Anche questo risultato assodò la tendenza nuova della mentalità fiorentina, perché fece ritornare i fuorusciti guelfi, portatori principali della nuova mentalità forse senza chiaro riconoscimento, e anche perché fece nascere una situazione molto adatta per questa nuova tendenza. Come un risultato della battaglia, ci apparve una barriera stabile dell’asse Francia-Napoli, abbastanza forte per proteggere i fiorentini fedeli guelfi. I fiorentini approfittarono questa barriera e poterono realizzare una gran riduzione delle armi che possiamo presumere dai numeri dei cavalieri reclutati alle guerre dopo quella di Montaperti. Anche il fatto che Firenze consegnò la signoria al re Carlo nel 1267 per dieci anni conferma questo cambiamento della mentalità popolare. Credo che ci sia stata nascostamente una opinione generale o una vaga unanimità che fosse andato via il tempo delle guerre e che fosse meglio praticare le proprie professioni individualmente. Nel caso delle altre città ghibelline o minori, non ci apparve il cambiamento della mentalità o non poterono approfittare abbastanza la barriera dell’asse Francia-Napoli in questa occasione.

Cap. III Anche nella propria condizione della produzione intellettuale, specialmente nel campo della letteratura, ci appariva qualche cambiamento radicale che facesse instabile le basi per la produzione intellettuale di prima. Fra questi cambiamenti, mi pare che il passaggio dalla letteratura orale alla letteratura scritta sia uno dei più importanti. Gli scrittori di Firenze approfittarono questo cambiamento, imparando o imitando i modelli francesi che poterono acquistare più facilmente sotto la barriera dell’asse Francia-Napoli.

第一章 中世フィレンツェの知的生産性の謎

まず参考のために、近年アメリカで刊行された Peter および Julia C. Bondanella 共編の『イタリア文学辞典』¹⁾ を例に取ってみよう。その辞書を瞥見して気付くことは、中世末期よりルネサンス期にかけて収録された著者たちの内で、フィレンツェ出身者もしくはフィレンツェに特別縁故の深い人々が著しく高率を占めているという事実である。そうしたフィレンツェ関係者を正確に定義して計上することは意外と困難な問題を含んでいるようであるが、前述の簡便な辞典からフィレンツェ出身者と関係者（フィレンツェ出身者の子孫およびフィレンツェを主たる活動拠点とした人）の比率を計算すると、次のような結果が生じる。

中世文学 総数 42人 出身者 16人 (38.10%) 関係者 2人 (4.76%)

計 18人 (42.86%)

(ただし Novellino の項は作品名だがその作者として数え、Favati の説²⁾に従い、フィレンツェ出身者には数えない。また Matteo Villani は、Giovanni と合わせて1人とする。なお関係者の2人とは、フィレンツェ出身者の子である Francesco Petrarca と Fazio degli Uberti)

ルネッサンス期文学 総数 81人 出身者 26人 (32.10%)

関係者 7人 (8.64%) 計 33人 (40.74%)

バロック期文学 総数 28人 出身者 4人 (14.28%)

関係者 2人 (7.14%) 計 6人 (21.43%)

啓蒙主義期文学 総数 25人 出身者 1人 (4%) 関係者 0 計 1人 (4%)

19世紀文学 総数 48人 出身者 1人 (2.08%) 関係者 2人 (4.16%) 計 3人 (6.25%)

20世紀文学 総数 100人 出身者 8人 (8%) 関係者 4人 (4%)

計 12人 (12%)

全期間を通じた数 総数 324人 出身者 56人 (17.28%)

関係者 17人 (5.25%) 計 73人 (22.53%)

なおこの辞典には、イタリア文学史の古来の伝統³⁾にもとづき、Machiavelli、Guicciardini は勿論、哲学者の Vico、Croce、自然科学者の Galilei、法学者の Beccaria など多方面の知識人が含まれており、イタリア人の知的業績をきわめて広範囲からカバーしていると思ないうる。以上の結果を眺める時、人口ではおそらく全イタリアのおよそ1%前後しかなかったと思われる都市が、中世末期よりルネッサンス期にかけて果していた知的役割の重要性に改めて驚かされるのではあるまいか。もっともこの辞典は、外国で刊行されたわずか600ページそこそこの中辞典にすぎず、その選択基準も今日のアメリカの常識を反映して偏っているという反論は十分に可能だろう。しかし、その率はとも角として、フィレンツェ人が果していた知的重要性が、イタリア文学研究者にとってごく常識化していることは、次のような一文からもうかがえる。

「(Machiavelli や Guicciardini の時代において) 結果的には選ばれた約100人の内およそ50人程度が俗人であると推定され、その内のうに4分の1はフィレンツェ人で、3分の1がトスカーナ人である。もし一世紀さかのぼって、フィレンツェおよびトスカーナ文学がまだ優勢だった時代なら、事態には何の不思議もないのだが…」⁴⁾

実は上の一文を記した C. Dionisotti の先駆的研究⁵⁾の後を承けて、こうした文献学の統計的研究は近年著しい進歩を示し、その成果は特に Einaudi から刊行された Letteratura italiana の Vol. II (Torino 1983) Produzione e consumo⁶⁾に収録されていて、容易に利用することができる。たとえば、14世紀および15～16世紀における Firenze の知的生産性の高さについてもさらにくわしい数字が把握されており、それは本論末尾の表 I および II の⁷⁾通りである。その資料では、出身よりも居

住および滞在が基準とされていることも加わって、結果にはやや差がみられはするものの、やはりフィレンツェの知的生産性の高さは、何人にも疑問の余地がない程はつきりしているといえる。

ところで、近年フィレンツェに関する研究は、イタリア本国の研究者よりも、英米の歴史研究者たちによってすすめられる傾向が強いという指摘⁸⁾がなされているが、英米の研究者に対するフィレンツェの魅力は、こうした知的生産性の高さに由来している点が大いなのではあるまいか。そういえば、ヴェネツィアはフィレンツェと共に、英米人の研究熱を喚起している⁹⁾都市だが、富や軍事力という点では、一時期のミラノ、ジェノヴァその他多くの都市が、これら両都市にゆうに匹敵していた。ところが今日フィレンツェとヴェネツィアのみが、別格の興味を喚起しているのは、やはりこの両都市で、他の諸都市にはかつてなかった知的および芸術的創造性が発揮され、その影響が西洋文明の伝統の根幹の一部をなして、英米人自身の教養の基礎となっているためではないかと考えられる。そういえば、戦後のルネッサンス研究中で、特に反響が大きかったという印象を受けた Baron¹⁰⁾ や Lopez¹¹⁾ の学説は、いずれも芸術的および知的な生産性および創造性の問題と深く関わっていて、それらの変化や飛躍の謎を解明するための新しい鍵を提出していたと考えられなくもない。勿論その反響は、いささかコロンブスの卵的な発想の新しさに起因するところが大いことは否定しえないが、それと共に、我々にとって最も魅力的な謎である、何故いわゆるルネッサンス期はあのように創造性に富んでいたのか、という問いに、たまたま部分的に答えていたためではないかと思われる。また Baron の重視した Gian-Galeazzo 相手の戦争よりも、その前の法王庁相手の Otto Santi 戦争の影響をより重視している Holmes の説¹²⁾も、先の Baron 説の修正案と見なそうだろう。ここで私が提案したいことは、むしろフィレンツェの知的生産性という問題を真正面から採り上げて、その状況をある程度客観的に把握すると共に、より多角的にその高さの謎を解明してみてはどうかということである。軍事的独裁者（あるいは宗教的権威）との戦い→合理的主義的思考の発展という、あるいは経済的停滞→芸術、文化、教育への投資という一元的な説明法は、たしかに衝撃的な明解さを伴っていて、その時点に関しては有効性を有していることは否定しえないであろう。しかしフィレンツェ史全体を通じて眺める時、世界史を学んだばかりの少年でも、では Dante, Petrarca, Boccaccio,あるいは Cimabue, Giotto の存在をどう説明するのかと質問してくるに違いあるまい。そして大抵の学説にとって、そうした素朴な質問こそ、最も手きびしい批判を含んでいるのである。この問題の場合も同様であって、末尾の表Ⅰに明らかな通り、質的問題はとも角、量的な視点に立つならば、すでに14世紀を通して、フィレンツェはイタリアの都市中で抜群の知的生産性を示してきたのである。だからもし仮に、前述した Baron, Holmes, Lopez らの説がすべて真理を含んでいて、彼らの指摘した事件や現象がフィレンツェの知的創造性に貢献していたとしても、それらは何ものもなかった所に作用していたのではなくて、すでに異常に活性化されていた土壌の上に作用したことを決して無視してはならないはずである。極端に言えば、彼らが指摘した要因は、すでに空中高く飛翔していた多段式ロケットを、さらに加速させただけの第何段目かのエンジンにすぎないのではあるまいか。

だから上述の諸説を全面的に否定する必要はないとしても、それらに加えて、フィレンツェが知的生産性において飛躍した最初の時点とその契機とを問い直すことが、まず必要なのであるまいか。本論はまずそうした謎解きを試みると共に、さらに当時の知的生産の状況を検討して、そうした飛躍の可能性の裏付けを行おうとするものである。

第二章 知的生産性飛躍の契機となった13世紀後半の2つの戦争

Davidsohn の『フィレンツェ史』¹⁾や、G. Villani 『年代記』²⁾は、ある時点までのフィレンツェがごく平凡な一コムーネだったことを示している。トスカーナ地方の首府は久しくルッカだった³⁾し、特定の皇帝をめぐる伝説⁴⁾なども、むしろこの都市の記録不足を示しているといえるようである。さらに本論にとって重要なことは、フィレンツェはピサのような港町でなかったために、東方をはじめ地中海一帯の先進地域の高い文明を先取りできなかったことで、当然交易の利益にあずかることも乏しかった。G. Villani が『年代記』の lib. IV, cap. XXXI⁵⁾で記したピサ海軍のマジョリカ島占領時のフィレンツェ市民の協力ぶりや、戦利品をめぐる単純素朴な同市民がピサ市民に騙されたという伝説などは、その当時のフィレンツェ市民を素朴で質実剛健な草創期のローマ市民のごとき姿で描いているが、潜在的な国力は大きくても、まだ先進国のピサに引きまわされて、その狡智（後のフィレンツェ市民が最も得意とする支配の手段）に盲従していた当時のフィレンツェ市の状況の表現とも読める。なお同書では、フィレンツェがピサとはじめて戦ったのは、1220年の Federico II の戴冠式の時、両市の大使が小犬をめぐる争ったのが原因だったと記されている⁶⁾が、その真偽はとも角、左程遠くない両市の衝突が意外に遅い時期に開始されたという事実が推察されるであろう。まだ未完成であったとはいえ、あの壮大な司教座教会が早くも1118年に法王 Gelasio II の手で神に献堂された⁷⁾という事実は、港町ピサの富強さの証明である。十字軍を推進したこの都市に対して、フィレンツェは13世紀のはじめまでおそらく従順な生徒であり続けたと見なしうるのではないだろうか。フィレンツェにとっては幸いなことに、ピサには余り遠くない同じ海域にジェノヴァという拮据なライヴァルがいて、その国力をしばらく上げた⁸⁾。この点でフィレンツェは内陸の都市であったことがかえって幸いしたといえよう。この当時の海港国同志の競争には、内陸国間のそれを上回る徹底性と激しさがみとめられるからである。

ところで本論にとってもう一つ重要な問題は、この当時の知識人の代名詞に近かった聖職者たちや、特に彼らを組織して指導していた教会との関係であるように思われるが、たしかにフィレンツェ市民は教会改革に熱心⁹⁾で、法王 Gregorio VII の支援者 Matilde 女伯の味方であった¹⁰⁾とか、十字軍にも若干参加者がいた¹¹⁾という記録があり、また立派な教会や修道院にも恵まれていた¹²⁾ことは確かであるが、特に目立っていたとは思えない。たとえば12世紀の後半に、皇帝 Federico I (Barbarossa) という超一流の君主を相手にして、ロンバルディア同盟を指導して戦い、相手を屈伏させた法王 Alessandro III (1159—81) が隣国シエナ出身¹³⁾で、続く Lucio III (1181—85) がルッカ出身¹⁴⁾であるのに対して、フィレンツェからは16世紀の Leone X (1513—21) の出現まで法王

は出ておらず、枢機郷でさえこの都市では仲々生れなかった¹⁵⁾。2人の甥と叔父とを枢機郷に任命し、Anagniの親族から20人の司教や大司教を作った¹⁶⁾というBonifazio VIIIは例外的だとしても、やはり縁故関係が重要だったこの時代に、教会内の中枢部にほとんど同市の出身者を久しく持たなかったことは、この市の文化的雰囲気に影響に及ぼしている筈である。勿論そうした影響はマイナス面ばかりではなく、その後の経過から見てプラス面も感じられるのであるが、それにもかかわらず、この都市はかなり長い期間にわたって、ほんのごく少数の例外¹⁷⁾を除くと、教会の中枢部から締め出されていたという事実をみとめざるをえないだろうし、そのことから、当時この都市が後世に実現したような高度の知的水準を保っていたわけではなかったことは推察しうるだろう。むしろ13世紀当初にこの都市の知的可能性を予想した人がいたら、上述の諸条件から推測してかなり悲観的な見通しを持ったのではないと思われる。少くとも表Ⅰ、Ⅱで見られたような抜群の生産性は絶対に予測できなかった筈である。ところが事実は上述の通りであり、このことから、13世紀のある時点に劇的ともいうべき変化が生じたことと、その後フィレンツェが息切れせずに約2世紀半にわたってすぐれた知的生産性を保ち続けたことが分る。その劇的な変化が生じた時期を知ることは比較的容易である。というのはAntonelliとBianchiniが末尾に示す表Ⅲ¹⁸⁾を作製しており、そこで13世紀の第三番目の四半期、厳密には1260—80¹⁹⁾年の期間に、トスカーナ地方において、他の地方には見られない知的生産性の飛躍がみとめられることが、明白に読み取れるからである。

第Ⅰ、Ⅱ表と異って、第Ⅲ表には都市別の数字が出ていないが、幸い附録²⁰⁾で著者一覧表が明記されているので、この時点におけるトスカーナ地方での劇的な変化が、フィレンツェを中心として（約30人がその出身者）、シエナ、ピサ、アレッツォ、ルッカなど各都市で生じた著者の驚異的な増加に基づいていることを知ることができる。思い切って単純化すれば、トスカーナ地方で13世紀第二期の5人が第三期の87人と実に17.4倍に増加しているという事実²¹⁾こそ、本論で先ず解明せねばならない謎ということになる。ここで問題は2つあるといえるだろう。先ず、この時点では、トスカーナ全域にこの劇的な飛躍が及んでいるが、一体この時期のトスカーナに何が起ったかという問題がある。次に第四期には生産性がかなり低下したが、フィレンツェではまだそれほど低落が目立たず、むしろこの時期にDante, Guido Cavalcanti,あるいはDino Compagniなどによる質的向上が目立ち、第Ⅰ、Ⅱ表がカバーする14世紀以降の高率を準備しており、フィレンツェとトスカーナの他の諸都市との較差が確立されてしまうのであるが、そうしたフィレンツェの圧倒的な優位性を決定した原因は何かということである。そこで私は本節において第Ⅲ表の問題の時点に生じた事件を検討し、その内の何がフィレンツェの知的生産性の飛躍とその高率の維持とに貢献したかを解明した後、さらに次節において当時の知的生産の条件を検討して本節の仮説を補強しておくことにしたい。

13世紀の第三四半期（第Ⅲ表では1260—80年）のフィレンツェ史を概観する時、何にもまして目につくのは、やはりその冒頭の1260年9月4日に生じたモンタペルティの敗戦に他ならない。次に、1266年2月26日にフランス王子Carlo d'AngiòとFederico IIの庶子Manfredi王との間で戦わ

れ、モンタペルティの敗戦の結果を帳消しにした、カンパーニア地方のベネヴェントの戦いが注目される。ある文化現象を戦争によって説明するやり方は、古来の常套手段であり、また前述の Baron や Holmes の論法にも似すぎているので、できることなら避けたいところであるが、やはりこの時点の変化を説明しようとして素直にフィレンツェ史をふり返った場合、どうしてもこれらの2つの戦争に着目せざるを得ないのである。しかもこれらの戦争のいずれか一方だけを重視するのは片手落ちであり、両者が相まってフィレンツェの知的風土に衝撃を与えたという見方に落ち着かざるをえない。古来フィレンツェは様々な幸運²²⁾に会って来たが、この2つの戦争の影響も、知的風土作りには恩恵そのものであった。だがその割には重要視されなかったという印象が否み難い。

ところでモンタペルティの戦いといえば、フィレンツェのプリーモ・ポポロを主体とするゲルフィ派と、シエナと Manfredi 王麾下のドイツ騎兵を主体とするギベツリーニ派との戦いとして、両派のイデオロギー的差異や、構成分子の階級などが注目されるかも知れない。勿論それらの考察も無意味とはいえないが、G. Villani の『年代記』などを素直に読む時、結局それはフィレンツェが試みた一連の周辺部の征服戦争の一部であったことを認めざるをえない。1250年の Federico II の死後、フィレンツェのポポロ体制が実行した一連の征服戦争については、Davidsohn がその『フィレンツェ史』中の第二巻第六章をあてて「勝利するポポロ²³⁾」という標題をつけ、モンタペルティの戦いをその末尾においているが、この配置は完全に妥当なもののように思われる。寡頭制から民主制に移行すると、国家は周辺を征服して拡大すると指摘したのは Vico の卓見²⁴⁾であるが、まさにフィレンツェではそうした現象が生じており、しかもそのやり方は必ずしも正義に充ちていたとはいえない。たとえば、G. Villani は、1252年の Fegghine 征服の項で、「(グイド・ノヴェッロ) 伯とその一行が立去ると、その土地は条約に反して略奪され、焼かれ、破壊された²⁵⁾」と記している。更に注目すべきことは、同じ1252年のフィオリノ金貨鑄造が、こうした征服や略奪とは無関係ではなかったらしいことで、「前に述べたもろもろの勝利と共にフィレンツェ軍が帰国し、休息した時、市は地位も富も領地也大いに上り、大変静かになった。そこでフィレンツェの商人たちは、名誉のためポポロやコムーネに対し、フィレンツェで金貨を鑄造するように要請した²⁶⁾」と記されている。今日の我々の想像では、フィオリン金貨の鑄造の契機を、フィレンツェ市民の盛大な商業活動とそれに伴う富の蓄積とに単純に結びつけたい所であるが、G. Villani はそれを戦勝に結びつけ、また Marchionne di Coppo Stefani も同様に、「勝利して帰国し、日毎に偉大になっていくのを見²⁷⁾」たことを、金貨鑄造の原因と考えているのである。こうした記述から考えると、当時フィレンツェ市民の意識の中では、戦争は大いにもうかる事業であると考えられていたと見なしでも差支えあるまい。当時貴族の一部が山賊化して略奪にあけくれていた²⁸⁾という事情を考えると、コムーネ全体が周辺の小都市の征服を、すなわち侵略および略奪を、致富の一手段と考えたとしても何ら意外ではなく、むしろ戦争には常にそうした要素が付きまといっている事実こそ念頭におくべきである。Gian-Galeazzo 戦争にしても、宣伝担当者たちの美辞麗句はとも角、富める都市の指導者たちの本音をさぐると、やはり常に略奪への恐怖が働いていることを忘れてはならないのではあるまいか。

モンタペルティの戦いの経緯を眺めると、プリーモ・ポポロの勢力が、従来の貴族階級であるゲルフィ派の指導者よりも、はるかに積極的、すなわち攻撃的かつ侵略的であることに気がつく。十年間周辺の諸都市に勝ち続けたポポロの指導者たちは戦いに強い自信を持っており、すでに少数だとはいえ Manfredi 王のドイツ騎兵とも戦って、これを打破り、奪った王の旗旗を引き回した²⁹⁾ 直後でもあるため、戦意はいやが上にも高揚していた。フィレンツェから亡命中であったギベッリーニ派の指導者 messer Farinata degli Uberti は、まさにこのポポロの好戦性、積極性を利用し、罠を仕掛け、フィレンツェ軍をモンタペルティにおびきよせたと記されている。従来の戦士階級であったゲルフィ派の騎士たちはこれに熱心に反対し、3ヶ月待てばドイツの騎士軍が去るからそれまで待つようにと説得したにもかかわらず、ポポロの指導者たちはその発言を禁止してまでシエナ遠征の計画を実現しようと努めた³⁰⁾。ただしその遠征は正面切っの攻撃ではなく、シエナの不正分子の手引きによる奇襲計画であったことも忘れてはならない。つまりフィレンツェ軍は、シエナの向う側の Montepuliciano の砦を攻撃に行くかに見せかけて出陣し、その途中でシエナの裏切者が城門を開いた途端に、城内になだれ込むという計画を立てていたのだが、ドイツ人騎兵800を中心とするシエナ軍とフィレンツェの亡命者が予想外に早く迎え撃ったことと、フィレンツェ軍の内部に Bocca Abati という裏切者がいて、突然旗手の手を切断したために、パニックが生じて一挙に潰滅し、「騎士階級の者は、真先に裏切りに気付いたために、名のある騎士は36人しか死者や捕虜の内に止まらなかった³¹⁾」のに対して、「フィレンツェのポポロのあらゆる家の出身の最良の者たち、あるいはルッカや他都市の戦場に現われた友人たちの2500人以上が戦場で死に、1500人以上が捕虜となり、こうして忘恩で傲慢なフィレンツェのポポロの激情が冷やされてしまった (S'adonò la rabbia…)」³²⁾ という結果となった。要するに両軍共に謀略を仕掛けたのだが、それまでの小都市攻めに用いられた不正分子の内通というポポロの長老 (anziani) の常とう手段よりも、Manfredi の軍隊をもまきこんで、しかも敵軍中に Bocca Abati という裏切り者を仕込んだ messer Farinata degli Uberti の謀略の方がはるかに高等だったというわけである。またその際 M. Farinata が常に計算に入れていたのは、どこまでも欲が深くて、自ら抑制する術を知らぬ当時のポポロの好戦性、攻撃性であった。この敗戦の結果、フィレンツェのゲルフィ派は一挙に弱体化し、トスカーナの最後の拠点だったルッカからさえ追放され、北イタリアから世界各地へと四散しなければならなかった。ところが G. Villani はここでも注目すべきコメントを加えている。それは次のごときものである。

「いみじくも多くの古人たちによって、(この時) フィレンツェのゲルフィ派の人々のルッカ退去は彼らの富の原因であったといわれている。何故なら退去した多くのフィレンツェ人たちは、山をこえてフランスへ行き、今だかつてないほど金もうけをしたからである。そこから後に莫大な富をフィレンツェに持ち帰った。そこで我々の間に、『必要が勇者を作る』という諺が生れた³³⁾」。

このコメントも、先程の金貨鑄造の記事同様、どこまで信頼できるものか判断に苦しむ。我々の通念としては、フィレンツェの富をもっと古い時代に遡らせたいし、プリーモ・ポポロにももっと

強力な財政的根拠をみとめたいからである。しかしこの説は『イル・ペコロネ』³⁴⁾などにも採用されており、ある程度常識化していたと見なせそうである。また先程の金貨鑄造の記事とあわせ読むと、ここに一つの転機をみとめることができるのではないだろうか。金貨鑄造当時には、他の都市を侵略し略奪することが、立派な致富の一手段であった。しかしモンタペルティで完敗した結果、ゲルフィ派の貴族やポポロの指導者たちには、そうした手段を用いる可能性が完全に失われてしまった。もっとも北イタリアに残り、モデナやレッジオのゲルフィ派に加勢した一部の貴族たちは、その後も暴力によって富を形成し、やがて Carlo d'Angiò 軍に合流して武名を高めて³⁵⁾いるのだが、フランスに赴いた市民たちは、そうした暴力的手段による致富から足を洗い、純然たる商人として事業に専念した結果、予想外の成功をおさめて莫大な富を形成したと考えられるのではないだろうか。すなわちモンタペルティ敗戦は、ポポロに暴力的手段からの方向転換を強いたわけで、当然同種の転換が、単に商人にのみ生じたのではなくて、法律家その他様々の分野で生じたと考えることが可能である。先程引用した部分に G. Villani の奇妙なことばがあったので原文を示していたが、「激情が冷やされてしまった……」³⁶⁾とは実に意味深いことばのように思われる。この「激情 (la rabbia)」ということばが実に示唆に富んでいる。とも角、従来トスカーナの周辺部の都市との戦いには常勝を誇り、トスカーナ制覇さえさして困難ではないと自惚れていたプリーモ・ポポロの軍隊が、真正面からぶつかれば恐らくこのころの西欧世界では最強だったと思われるドイツ騎士軍によってあっさりと蹂躪された結果、この時点で戦士としての可能性に見切りをつけ、別の道を探る決心をしたと解釈することができるだろう。なお個人であれ団体であれ、暴力的手段による可能性を信じている限り、他の手段には、二義的価値しか認められないように思われる。略奪が簡単に可能で、しかもどんな形の制裁も報復も起りえない場合、略奪以外の手段が真面目に考慮され努力されはしない。1260年の敗戦以前のポポロは、どうやらそれに似た怖いもの知らずの状態だったようである。ところがこの敗戦は、フィレンツェ軍の中でも、特に戦意が盛んで戦線拡大の原動力であった、ポポロの最上層に最も大きな打撃を与えたことは、すでに見た通りである。こうしてプリーモ・ポポロの体制は崩壊し、フィレンツェ市はギベッリーニ派の支配下に入った。messer Farinata は、ギベッリーニ派の会議で、フィレンツェを破壊しようという提案に反対して、『年代記』や『神曲』³⁷⁾に不朽の名を留めた。

ところがゲルフィ派にとって幸運なことに、一時期永続するかに見えたトスカーナのギベッリーニ体制は、ベネヴェントにおける Carlo d'Angiò の勝利と共にあっけなく崩れて、わずか6年後に祖国への復帰を実現した。しかしギベッリーニ派が立去った後も、もはやかつてのような強力な軍事組織が復活しなかったことは、Waley の著書に記載されているそれ以後の一連の戦争におけるフィレンツェ軍の騎士の動員数から見て明白である。

1260年から1325年にかけて4大戦争に従軍したフィレンツェ軍騎士の概数³⁸⁾

1260 (モンタペルティの戦い)	1,400
1289 (カンバルディーノの戦い)	600

1315 (モンテカティーニの戦い)	300 (ないしそれ以上)
1325 (アルトパッシオの戦い)	500

すなわちモンタベルティ以後、騎士の動員数は一挙に半分以上に減少し、ルッカに出現した軍事的天才 Castruccio Castracani の脅威をもってしても、元の状態の半分にも回復させることはなかったことが明らかである。これによっても、モンタベルティの戦いが、フィレンツェ市民の意識に变革をもたらし、戦闘のやり方そのものをも変えたことが推察しうる。勿論フィレンツェ市は、これだけ動員力が低下しては、傭兵に依存せざるをえなくなる。おそらくその弊害は当初から予想されていたにもかかわらず、その後恒久的に傭兵依存の体制を続けざるをえなかった。そういえば当時のイタリアを代表する5大国の内、特殊な性格を備えた教会国家を除くと、フィレンツェ共和国傭兵依存の弱点が露骨に表面化していた国家は珍しいように思われる。勿論時期的に消長はみとめられるが、ミラノ、ヴェネツィア、ナポリはいずれも一応の軍事力を備え、フィレンツェは常時その脅威にさらされている³⁹⁾。他方フィレンツェ自体は、その経済力によって領地の拡大を実現してはいるものの、他の三国に脅威を及ぼすほどの軍事大国にはなりえなかった。それどころか、Ugucione da Faggiola や Castruccio Castracani らのような小国の君主によってさえ脅威を感じねばならなかった。Duca d'Atene の政権の成立や、Cosimo il Vecchio の権力などにも、ナポリ王国やミラノ公国の軍事力が微妙に影響しているものであり、こうしたフィレンツェ共和国の軍事面での虚弱性は、この国の歴史自体を性格づけている重要な要因なのであるが、こうした体質が生じたのもまさに1260年のモンタベルティ敗戦を境としてであり、その背後にはポポロ階層の戦争ばなれがあったのだ。

さらに注目すべきことは、ベネヴェントの戦いの翌年、フィレンツェ市が領主権 (signoria) を10年間にわたって、Carlo d'Angiò に委任した⁴⁰⁾ という事実である。我々は Gian-Ggaleazzo 戦争当時のプロパガンダとか、共和政末期の歴史書などから、フィレンツェ市民が自治権によせる熱意を過大評価しがちであるが、少なくとも Duca d'Atene 追放のころまでは、フィレンツェ市民の大多数の間ではそれほど明確な主権意識が確立されていたようには思えない。たとえばこの時だけでなく、Castruccio Castracani 相手の戦争の末期でも、Duca di Calabria に領主権が委ねられている⁴¹⁾ し、一年で追放されたとはいえ、Duca d'Atene が終身領主選ばれた⁴²⁾ ことはあまりにも有名である。また長期間フィレンツェ共和政のいない手の主体となった黒派自体、フランス王子 Carlo di Valois の軍隊の干渉のおかげで政権を奪取⁴³⁾ しえたのだが、Dante や Dino Compagni⁴⁴⁾ のような反対派の憤慨にもかかわらず、彼ら自身外国軍隊の援助で祖国の支配権を獲得したことを深く恥じている様子もなく、また市民の反撥も特に強くはなかった。黒派と白派の最大の相違点は、結局黒派がフランスーナポリを軸とするゲルフィ勢力 (それはやがて仏王対法王の対立で分裂するが) と結び、白派が自国内の基盤でこれに対抗しようとした点にあるといえよう。Dante が19世紀に愛国詩人として好まれたのも、こうした立場に立脚していることが一因となっている。しかし現実のフィレンツェは、シチリア晩禱事件等で多少の衰えはみとめられたものの、まだ圧倒的に優勢なフランスー

ナポリを軸とするゲルフィ勢力の傘の中で安住することを求めていた。先に見たような極端といえる程顕著な軍事力ばなれが行えたのも、実はこのフランスーナポリを軸とするゲルフィ勢力の傘が、イタリア半島の大部分をすっぽりと包んでいたためで、もはや多少の軍事力の強化は無意味に近く、その代り多少の弱体化もさほど大きな被害をもたらさないことを、追放を通じて国際化した有力市民たちは十分にわきまえていたからである。

このようにしてベネヴェントの戦いの結果は、すでに始まっていたフィレンツェ市民の軍事ばなれを一層促進させることになった。まだ共同体意識が強く、おそらく「家」の統制を通して青年たちの行動がきびしく規制を受けていたと考えられるこの時代に、コムーネ全体で積極的な戦意が低下し軍事ばなれが進行した場合、個人の行動の選択にも大巾な自由が生じえた筈で、その結果は今日の我々の予想をはるかに上回っていたと思われる。G. Villani はモンタペルティ戦争以後の莫大な商業利益を指摘しているが、他の分野でも同様の現象が生じたと考えても少しも不思議ではなく、むしろそうした類推は当然行われなければならないのである。

ところで先に見た通り、13世紀の第三四半期に著者の数が飛躍的に増加したのは、フィレンツェだけでなく、トスカナ全域においてであった。その理由は、この時代の戦争が従来の都市間の戦争とは違って、国際的性格が強く、文化の伝播を促進して知的生産性を高め、また多くの亡命者を生んで、彼らに新しい知識を吸収させたことによっているといえるであろう。問題はむしろ、フィレンツェと異なり他の地域では何故その生産性を持続しなかったかということである。まずモンタペルティ戦争に勝ったシエナをはじめとする、ギベッリーニ派が有力だった諸都市については、比較的容易に説明がつくであろう。なまじ戦いに勝ったことで、戦闘集団としての性格からぬけきれず、しかも間もなくベネヴェントの戦いの結果劣勢に陥ってしまい、今度は自衛上ますます不利な戦いを強いられて精力を消耗せねばならなかった。しかもその後敗戦を喫しても、自律的に軍事ばなれを選ぶ契機も余裕も与えられなかったというわけである。やはりフィレンツェのように、圧倒的に優勢なゲルフィ派の傘の中に安住できなかったという事情が、致命的なハンディキャップを成しているようである。また、その他のゲルフィ都市については、余りにも弱小すぎるために、この当時常に存在していた都市内外のいざこざだけでも十分に軍事的負担となりえたといえよう。その点たとえ騎士の動員数が4割近くに減っても、なお周辺都市と優勢に戦いえたフィレンツェのみが、ゲルフィ派の傘をもフルに活用できたわけで、強者が益々得をする事情は特に珍しいことではないだろう。このように考えると、2つの戦争の結果は、フィレンツェにのみ稀有の幸運を与えたといっても過言ではないように思われる。

第三章 当時の知的生産の状況から見たフィレンツェの飛躍の条件

ここで少し視点を変えて、当時の知的生産の状況からこの問題を考察してみることにはしたい。まずヨーロッパの大勢から考察する時、当時のイタリアは文学的創造に関して、むしろ低調な後進地域であったことをみとめざるをえないであろう。近年イタリア文学史にラテン文学を大巾に取り入

れようとする動き¹⁾があり、その場合イタリア文学の起源は一挙に千年近く遡るわけであるが、その場合にも途中に何世紀にもわたる断絶があることを承認せざるをえないはずである。特に10～12世紀にかけて、ヨーロッパの他の諸国では早くも口語の文学が開花しつつあった時期に、イタリアでは低調な状態が続いていたことと、ダンテの出現まで、フランス語の『ロランの歌』、『バラ物語』、ドイツ語の『ニーベルンゲンの歌』、スペイン語のエル・シド伝説、あるいはケルト族のアーサー王伝説や北欧の神話に匹敵しうような作品は一篇だに創造されなかったという事実は否定できないのである。また「ラテン語の分野でも（イタリア人の）詩人は極めて少なかった²⁾」という Migliorini の指摘も基本的に正しい。ところが E. R. Curtius によると、ヨーロッパにおける文学の首位権が、およそ2世紀間つまり1100年から1275年まで止まっていたフランスをはなれて、早くも「1300年以後すでにイタリアに移っていた³⁾」と見なされている。末尾の表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで見た通り、13世紀の後半に飛躍的に著者がふえたのはイタリアの中でもトスカーナ地方のみであり、またその優位を維持したのはトスカーナの中でもフィレンツェのみであった。ということは、当初主にフィレンツェ市民およびその関係者の手に首位権が移動したと見なしうであろう。それまでにはほとんど実績がなく、経験的には可能性が乏しいと思われるこの地方の一都市に、一体何故このような飛躍が生じたか。前節では市民が軍事的野心を放棄し、一時期は主権までも他国の君主に委ねるほどに国際化することによって、市民の間で相対的に大巾な行動の自由を得るに至った経緯を示したが、それだけではこの時期の知的生産性の上昇を説明するのには不十分である。続いて、何故この時解き放された彼らの活動意欲が、文学や学問などといった知的活動の面に向けられたのかを説明する必要があるだろう。勿論人間の活動の理由を完全に説明し尽すことは不可能であるが、結局この時期に知的生産活動に新しい精力を吸収する条件が存在していたことを示せば、ある程度疑問に答えたことになるであろう。

まず注意すべきことは、トスカーナとりわけフィレンツェが、従来の知的生産活動において低調な地域であったとはいえ、イタリアが必らずしも文化的後進地域だったとはいえないことである。たとえば19世紀のロシアや今世紀の南米など、それまで文学的辺境であった地域に、旺盛な創造活動が見られることが決して稀ではない。むしろ辺境であることが、豊饒であることの前提条件でさえありうるともいえる。しかしこの当時のイタリアに関しては、そうした辺境を想定しては、大きな誤解が生じるであろう。たしかに知的生産性はかなりの期間低下していたけれども、人々の生活の程度や意識が低かったと即断するわけにはいかない。Ottocar が指摘⁴⁾したように、北ヨーロッパとイタリアや南仏とでは社会がかなり異質であり、たとえば Ariès の子供や教育に関する研究⁵⁾などを読むと、同じような事象がイタリアでは北ヨーロッパよりもはるかに早く起っている例が珍しくない。まず Ariès が強調している、ヨーロッパでは久しく「子供」という観念が確立していなかったという仮説⁶⁾ですら、『神曲』などでははなはだ怪しくなる。すでにかつて私が指摘した通り、ダンテは未成年には責任能力がないとして、地獄や煉獄の苦しみを子供から免除し、したがって子供は話題には上っても、その霊に直接出会うことはない⁷⁾。なお Ugolino 伯の子供にふれた所では、

これらの幼き者の無力さに同情が示され、Ugolino 伯と共に餓死させた行為が非難されている⁸⁾。また Giovanni Dominici 師の作品から、すでに14世紀には、フィレンツェの親たちが子供を非常に甘やかして大事にしていたことが分る⁹⁾。Ariès の著書が名著の誉れが高い点から考えて、おそらく私の指摘したような点は、イタリアにのみ生じた例外的な事象であると思われ、ヨーロッパにおけるイタリア社会の異例の早熟性の現われだと考えられる。あるいはむしろ、同じ物差しで前後を測ることが許されないほど異質だったと考えるべきであるのかも知れない。とも角そのように、ある一面ではフランスよりもはるかに発達しつつ、知的生産の面ではほとんど眠っているかに見える、発達の不均衡な社会が、13世紀の中ごろのイタリアに見出されたといえるだろう。それは真の辺境における後進性とは異質の停滞性で、いわば過飽和状態の溶液のように、わずかな刺激で一挙に結晶が凝固しうる状態であった。13世紀の第二期から第三期にかけて生じた5人が一挙に87人にはね上ったという変化は、何かこうした条件でも考えなければ到底説明しがたいように思われる。前節で見たような2つの戦争の影響も、まさにこうした素地があった上で作用したと考えるべきだろう。この場合、イタリアの長期にわたる知的生産面での不振こそ異常だったと見るべきで、その原因がイタリアでは封建制度の発達が比較的弱かったため、かえってコムーネ市民間の競争が無秩序に激化し、市民は暴力的緊張から解放されなかったためだと考えれば、容易に理解しうる筈だ。イタリアの都市と北ヨーロッパの都市の異質さを指摘したのはロシア人の Ottocar で、別の歴史家たちは、むしろ普遍的な発展段階説¹⁰⁾をイタリア都市にもあてはめようと試み、それもある程度妥当であるかに見えたのである。また、プリーモ・ポポロ当時のみならず、その後20世紀のファシズム時代に至るまで、イタリアではローマ時代のような強力な軍事国家の建設が何度となく企てられてきている。だからイタリアあるいはフィレンツェ共和国が本来どのような素質を持っていたかなどと断定することは、おそらく誰にも許されないことであろう。しかし13世紀の後半に起った2つの戦いの結果、トスカーナきっての強力で好戦的だった国家が、一挙に軍事力を大巾に削減し、その体制が長期間続いて、その間に市民たちは驚異的なまでに高度の知的生産性を発揮したことを考慮すると、この時の方向転換はフィレンツェ市民の潜在的素質に適したものであったと評価することが許されるのではないだろうか。

だがたとえいかに潜在的素質があっても、それが実現するには何らかの触媒作用のようなものが必要だった。この時期のトスカーナやフィレンツェにとって、そうした作用を果たしたのは、やはり何といっても、その頃まで文学的首位権を保持していたといわれるフランスとの接触、とりわけ人的交流だったに違いない。すでに見た通り、ルッカを退去した亡命者たちは、多数山をこえてフランスに入り、莫大な富を築いているし、その後間もなくナポリに Angiò 王朝が成立、より身近にフランスの出店ができ、それがゲルフィ派の盟主である以上、否応なしに接触せざるをえなかった。それどころか、フィレンツェは Carlo 王に10年間支配権を委ねて、その代官の支配を受けることさえしている。こうしてフィレンツェは二重、三重にフランスとの接触を重ねて、その度にフランス文化を吸収した。ただしすでに見た通り、フィレンツェがフランス人を師匠扱いしていたとは考え

にくい。文学作品の有無はとも角、生活のあり方や知識量において、当時のイタリア人がそれほどフランスを全面的に尊敬しえたとは考えられないからである。しかしいづれにしても、やはり当時の騎士道文化の中心であったフランスと接触したことは、フィレンツェ文化の発展にとって強力な刺激となったことは疑いない。少くとも他のどの国との接触よりも得るものが大きかったことは、確実だといえそうである。

さらに知的生産における一そう客観的な条件も、フィレンツェの知的生産性の飛躍に有利に作用していたといえそうである。先に見た Curtius の説¹¹⁾によると、イタリアは、1300年ごろから約2世紀にわたって、文学における首位権を保っていたとされている。その時期は、約50年ずつ早めると、ヨーロッパにおいて紙の使用が普及¹²⁾した時期から、Gutenberg が印刷術を発明した時期までの間に一致している。当時の社会の保守性を考慮すると、これら2つの技術革新の結果が決定的になった時期と見なしうるであろう。つまりヨーロッパにおけるイタリアの文学の優位は、紙が普及して、作品のコピーが容易になった時期に確立され、印刷術が普及して書物の流通が盛んになった時期に低下しているのだ。12世紀にアラブからヨーロッパで最初に紙を持ちこまれた¹³⁾国であるイタリアは、その後も紙と深い関係を持ち続け、特にファブリアーノの「紙の溪流」¹⁴⁾において、麻布(後に木綿)を裂きかつ砕くために水車を用いるという画期的な発明がなされて以来、永年最大の生産国であると共に、ヨーロッパ各地に職人を輸出して、技術指導を行ったといわれる。紙が量産され、比較的安価に入手しえるようになると、当然教育や文学のあり方にも影響を及ぼさざるをえない。需要が先か供給が先かという議論はおそらく無意味であって、紙の普及が写本やメモの類を増加させ、その増加がさらに紙の需要を促進させたという仕方で、両者は互いに高め合って可速度的に増大していったはずである。まさにこの当時、文学のあり方が口誦文学から記述文学へと大巾に移行しつつあったといわれるが、紙の普及は、こうした移行を促進するのに大いに役立ったはずである。早くから紙が普及したために、イタリアでは記述文学への転換が他の国より多少容易であったことは考えられないことではない。

要するにこの時代の文学の状況にとって最大の問題は、この口誦性から記述性への転換という現象であった、と考えるべきではないだろうか。まさしくこの時代に、フランスを中心に一定の完成に達していた口誦的な文学が行き詰まり、記述化の方向に出口を模索していたといえるのではあるまいか。このような転換期にあったため、それまで実績が乏しかったイタリアに機会が回ってきたといえそうである。その場合、イタリアとりわけフィレンツェにはいくつか有利な点があった。まず旧来の伝統が強くないので、新しい文学享受方法に強い抵抗がなかったこと。この新しい享受方法は、最終的には個人の精読型を志向したが、現実的には書物が少なく、識字人口が乏しいという条件に制約されて、一人が朗読し解説したものを多数で楽しむという朗読型や、一人が読んだ内容を語り直すという殆んど口誦型に近い場合が多かったはずである。しかし従来の専門の芸人による口誦文学の受容に比較すると、新しいテキスト次第でいくらかでも内容を多様にさせえたり、時には朗読の途中で追加したり変更することも可能であった。フィレンツェの新興市民にとっては、芸術

的完成度の高い抒情詩や雄大な叙事詩よりも、哲学上の常識や、外国の事情を聞く方が有益であつたし、過去の市民の歴史を語られる方が興味深かつたであろう。さらにこうした方式の特長は、読み手もしくは語り手が容易に交代しえたことで、また作者も特に誰と固定される必要はなかつた。こうして詩を交互に朗読したり、お互いに用意した手紙を読んで、相手を罵倒し合ったりすることができた。こうした方法の利点は、多数で負担を分かちあうため、比較的容易に創造の苦しみを乗りこえることであろう。往復書簡、喧嘩詩、滑稽文学など、この当時そうした集団享受から生れた作品が多数存在する。ノヴェッラにも、聞き手との共同作業の効果を感じさせる作品が存在している。しかしそうした利点は同時に欠点でもあつた。『神曲』その他若干の例外を除くと、統一性や完成度の点で不完全な作品が多い。Dante は最初はそうした共同体的な創作グループに加わりながら、『新生』によって純度の高い精読型の文学を完成させ、さらに孤独で野心的な企てに着手している（ただし『神曲』は巧妙に集団享受が可能ないように作られており、その重層性は見事である）。

これまでに記したフィレンツェ文学の特性を逸早く一身に兼ね備えて、その可能性を同時代の人々の前で具体的に実現して見せた作家を1人示すとすれば、やはり Brunetto Latini¹⁵⁾ をあげざるをえないだろう。彼はモンタペルティ戦当時、スペイン使節として国外にいて、そのままフランスに亡命し、フランス語で一種の百科辞典『トレゾール』等を書いた後、Carlo 王の軍隊と共に帰国、ベネヴェント戦後は市内外の要職につきつつ、啓蒙的だが、自伝的内容も含む長詩『テゾレット』をはじめ、『修辞学』やキケロの翻訳等、当時の市民の要求を鋭敏に反映した著書を何冊も残した。質的評価はとも角、ここには明白に、将来のフィレンツェ文学の開拓しうる分野が示されており、Dante が彼に対して地獄の中で呼びかけた

M' insegnate come l'uom s'eterna¹⁶⁾ (人が不朽となる道を汝は我に示し給うた)

ということばがまさに字義通りの真実であると納得できるからである。

注

第一章

- 1) Peter Bondanella, Julia Conaway Bondanella, Dictionary of Italian Literature, Connecticut 1979.
- 2) 従来 Novellino の作者はフィレンツェ出身者と考えられ、purista の基本文献の1つであつたが、Favati がその起源は北イタリアだと指摘し、現在ではその説の方が有力になっているようである。V. Branca 編 Dizionario Critico della Letteratura Italiana Vol. II, pp. 699-706 の Novellino の項参照。
- 3) Tiraboschi の Storia della Letteratura Italiana には Galilei, Torricelli についての記述があり、De Sanctis の『イタリア文学史』にも、第14章の「新しい学問」の中で Bruno や Vico が論じられている。戦後の文学史でもその伝統は守られている。
- 4) Carlo Dionisotti, Geografia e storia della letterature italiana, Torino 1967 所収の Cherici e laici の一節, pp.76-77.
- 5) 4) の論文集に含まれた一連の論文、特に標題論文。
- 6) AA. VV. Letteratura italiana, Vol. II Produzione e consumo, Torino 1983 所収の一連の論文。特に Classi e collocazione dei letterati の部分に含まれた Roberto Antonelli e Simonetta Bianchini, Dal clericus al Poeta, pp.171-227, Christian Bec, Lo statuto socio-professionale degli scrittori (Trecento e Cinquecento), pp. 229-267. Id. I mercanti scrittori, pp. 269-297, Vincenzo de Caprio, Aristocrazia e clero dalla crisi dell'Umanesimo alla Controriforma pp. 299-361 等がこの当時の著者の出身地、職業、身分、社会的環境を知るのに有益である。また C. Bec の新著 Les livres des florentins (1413-1608), Firenze 1984 は、タイトルに記された時代のフィレンツェ人の蔵書の状況、当時のベストセラーの変化などを知る手がかりを与えてくれる。

- 7) C. Bec, *Lo statuto*…… (前注参照) 所収 pp. 234–235 および pp. 250–251.
- 8) Gene Brucker, *Tales of Two Cities, Florence and Venice in the Renaissance*, *The American Historical Review*, Vol. 88, Num. 3, June 1983, pp. 599–616. の冒頭部。
- 9) Id.
- 10) *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, New Jersey 1966 等で論じられた, Milano 公 Gian-Galeazzo への抵抗が, フィレンツェ市民の知的覚醒をもたらしたとする説。
- 11) Robert S. Lopez, *Hard times and investment in culture* (New York and Evanston 1962年刊行の論文集中に所収) 等で発表された, ルネッサンス期を経済的低落 (depression) および低水準における安定 (stabilization) の時代と見なして, 危険な投資を避けた結果, 芸術や文化, 教育などに投資が行われたとする説。
- 12) 残念ながら George Holmes の論文は入手できず, John Larner, *Culture and Society in Italy 1290–1420*, New York 1971, p. 350 より得た知識だが, 参考にすべき点もあるように思われるので取り上げた。

第二章

- 1) Robert Davidsohn, *Storia di Firenze*, Vol. I, *Le origini*, Firenze 1972.
- 2) G. Villani, *Cronica*, Roma 1980 (Firenze 1823 の複製刊) を利用, 特にその Tomo I。この作者は Fiesole 伝説でフィレンツェを飾る。
- 3) Augusto Mancini, *Storia di Lucca*, Firenze 1950, p. 23 および p. 38 によると, ロンゴバルド族支配下のトスカーナの首府はルッカで, フランク族の侯たちもルッカに居住したとある。しかし Matilde 女伯はフィレンツェの郊外にも居住したことがあるようだ。
- 4) G. Villani, op. cit., pp. 134 sgg. (lib. III, cap. I) の Carlo Magno 帝によるフィレンツェ再建伝説や同書 p. 151 (lib. IV, cap. I) の Otto I との深い関係など。
- 5) id. pp. 205–206.
- 6) id. Tomo II, pp. 7–9 (lib. VI, cap. II).
- 7) *Enciclopedia Italiana*, Vol. XXVII, Roma 1949, p. 393.
- 8) id. p. 402 などに見られるように, 特に1284年8月6日の Meloria の敗戦で打撃を受け, 1299年にはコルシカ島その他をジェノヴァに譲らねばならなかった。
- 9) G. Villani, op. cit., Tomo I, pp. 178–179 (lib. IV, cap. XVII) の Giovanni Gualberti の改革運動は特に有名である。
- 10) id. pp. 189 sgg. (lib. IV, cap. XXI).
- 11) id. pp. 197–198 (lib. IV, cap. XXIV).
- 12) 特にフィレンツェにとっては, ベネディクト派の Vallombrosa の修道院 (1012年), Servi di Maria 派の SS. Annunziata 修道院 (1233年), ドメニコ派の Santa Maria Novella 修道院 (1278年), フランチェスコ派の Santa Croce 修道院 (1294年), 等々が大きな精神的影響を及ぼした。
- 13) Agostina Saba, *Storia dei Papi*, Torino 1966, Vol. I, p. 668.
- 14) id. p. 677.
- 15) G. Villani は, op. cit., tomo VII, p. 19 (lib. X II, cap. VI) でそのことを指適する。Papisti 家の法王は伝説に過ぎないようである。
- 16) id. tomo III, p. 111 (lib. VIII, cap. LXIV) にそのように記されている。
- 17) たとえば, 教会改革運動当時の Pietro Igneo や, 1071年フィレンツェ司教となった Ranieri などは, 法王に重用されている。R. Davidsohn, op. cit., pp. 355–6 および pp. 367–368.
- 18) 第一章の注 6) 参照。Antonelli e Bianchini の前出論文, p. 212 の表。
- 19) id. p. 214 でこうした変則な年代区分を行う理由を説明し, これによって Federico II 派の詩人は全部第二期, comune の詩人は第三期に入るとすると共に, さらに1260–80年を伝統的にみとめられたフィレンツェのヘゲモニーの開始としている。
- 20) id. pp. 225–227.
- 21) 表Ⅲの Toscana の行を参照。
- 22) ゴート王 Radagasio に攻められた時, 皇帝 Onorio に助けられた等の逸話あり, また Totile による破壊も考古学的に考えて真実ではないとされている。したがって別の幸運と考えられた Carlo Magno による再建の伝説は真実ではないとい

うことになる。

- 23) Davidsohn, op. cit., Vol. II, pp. 535–696.
- 24) ジャンバッティスタ・ヴィーコ, 清水・米山訳, 『新しい学』, 東京 1975, 第四卷, 第十四部, 第一章, p. 507 [1024].
- 25) G. Villani, op. cit., tomo II, P. 76 (lib. VI, cap. V)
- 26) id. p. 77 (lib. VI, cap. LIII).
- 27) Marchionne di Coppo Stefani, Cronaca Fiorentina, a cura di Nicolò Rodolico, Raccolta degli Storici Italiani T. XXX, P.1, Città di Castello 1903, p. 41 Rubrica 103^a.
- 28) たとえば Sercambi, Bandello 等のノヴェッラの中には, 貴族の暴力犯罪や略奪が数多く記されている。
- 29) G. Villani, op. cit., pp. 103–104 (lib. VI, cap. LXXV).
- 30) id. pp. 105–108 (lib. VI, cap. LXXVII). 合戦は id. pp. 108–112 (Lib. VI, cap. LXXVIII).
- 31) id. p. 111.
- 32) id.
- 33) id. pp. 122–123 (lib. VI, cap. LXXXV).
- 34) 『イル・ペコロネ』の第八日第二話にこの戦いの模様が記され, その末尾にこのコメントが紹介される。
- 35) G. Villani, op. cit., pp. 123–125 (lib. VI, cap. LXXXVI).
- 36) 注32) 参照。
- 37) G. Villani, op. cit., pp. 117–118 (lib. VI, cap. LXXXI) および Dante Alighieri, Divina Commedia, Inferno, Canto X, 32 sgg.
- 38) D. ウェーリー, 森田鉄郎訳 『イタリアの都市国家』, 東京 1971, p. 168.
- 39) Venezia の海軍力はあまりにも有名であるし, ミラノ公 Gian-Galeazzo やナポリ王 Ferdinando I (通称 Ferrante) の武力はフィレンツェにとって脅威的となった。
- 40) Giuseppe Maria Mecatti, Storia cronologica della città di Firenze, Vol. I, Napoli 1755, p. 74 (1267 年の項)。同書はやや古い, かわしい年表なので引用しておく。勿論他の多くの文献に同じ事実が記されている。
- 41) id. p. 138 (1325 年の項)。
- 42) id. p. 185 (1342 年の項)。
- 43) id. pp. 98–99 (1301 年および 1302 年の項)。
- 44) 白黒闘争で Dante は追放され, Dino Compagni は失脚, Dino のCronica delle cose occorrenti ne' tempi suoi (1270–1312) にその事情がくわしく記されている。Dante は, Purgatorio, Canto XX, 70–72 行で Carlo di Valois がカペー王家の悪逆さを天下に知らせるだろうと, その先祖 Ugo Ciappetta の口から予告させる。

第三章

- 1) たとえば Ricciardi 版, La letteratura Italiana Storia e Testi Vol. I, Le Origini, Milano–Napoli 年代不明 では Severino Boezio (480–524) の作品がまず収録されており, 文学史では Sant' Agostino から始まることが多いという。
- 2) B. Migliorini, Breve storia della lingua italiana, Firenze 1966, p. 47.
- 3) E. R. クルティウス, 南大路他訳, 『ヨーロッパ文学とラテン中世』, 東京 1972, pp. 41–42.
- 4) オットカール, 清水・佐藤訳, 『中世の都市コムーネ』, 東京 1972
- 5) フィリップ・アリエス, 杉山光信・恵美子訳, 『〈子供〉の誕生』, 東京 1981, および同, 中内・森田編訳, 『〈教育〉の誕生』, 東京 1983など。
- 6) 前掲の『〈子供〉の誕生』の第一部「子供期へのまなざし」の第二章「子供期の発見」で指摘された重要な仮説。
- 7) 拙稿, ダンテの作品における「家」の意味, (2), 『イタリア学会誌』第二十六号, 京都 1978, pp. 1–2.
- 8) Dante Alighieri, Inferno, XXXIII の88行目に Innocenti faceva l'età novella とあり, 「若年が彼らが無罪としている」と明記されている。
- 9) Beato Giovanni Dominici, Regola del governo di cura familiare, Firenze 1927, pp. 108–109 に子供の洗礼の際豪華な衣裳を用いるなど, 子供を甘やかす親のことが明記されている。
- 10) たとえばマルクス主義の影響を受けた G. Salvemini などが, Ottocar の代表的論敵だった。
- 11) 注3) 参照。
- 12) Lucien Febvre et Henri–Jean Martin, L'apparition du livre, Paris 1971, pp. 40–41.

13) id. p. 41-42.

14) 注7) の Vol. XIV, pp. 701-703 のFabriano の項参照。引用したことは p. 701。

15) (1220 circa-1294 circa)。以下の記述は主に注2) の V. Branca 編のD. C. d. L. IT. Vol. II の pp. 361-364 による。

16) Dante Alighieri, Inferno, XV, 85.

表Ⅰ．14世紀の著者の出身地および滞在地

Bec, Lo statuto socio-professionale degli scrittori (p. 235) より

14世紀ではⅠ，Ⅱ，Ⅲ期に3等分される。長期滞在とは平均15年，短期滞在とは平均2～3年程度

地方名および その主要都市名	出身地			終身的滞在地			長期滞在地			短期滞在地		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
ピエモンテ・リグリア地方	1	—	1	1	—	1	—	—	0	1	2	1
ロンバルディア地方	5	6	1	2	—	—	—	7	7	7	9	7
ミラノ	—	—	—	2	—	—	—	5	4	2	3	4
ヴェネト地方	21	11	19	14	9	13	9	10	28	18	3	12
パドヴァ	8	2	2	11	—	2	—	6	12	6	5	4
トレヴィゾ	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3	—	—
ヴェネツィア	4	2	4	3	3	4	4	2	6	—	2	3
ヴェローナ	2	—	6	2	—	5	—	2	8	4	2	—
ヴィチェンツァ	—	2	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—
エミリア・ロマーニャ地方	5	7	7	1	—	3	9	10	16	17	18	16
ボローニャ	3	3	3	—	—	3	7	7	10	13	10	7
フェルラーラ	—	—	2	—	—	—	—	—	5	—	3	6
ラヴェンナ	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2	—
トスカーナ地方	33	38	41	16	18	16	14	8	16	23	27	33
アレツォ	4	2	2	4	—	—	2	—	—	—	2	—
フィレンツェ	11	18	18	6	11	15	8	6	9	8	4	7
ルッカ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—
ピサ	4	2	3	—	—	—	2	2	2	—	6	7
ピストイア	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シエナ	4	6	6	4	6	—	—	—	—	—	2	7
マルケ地方	6	—	—	—	—	—	3	1	2	3	4	1
ウンブリア地方	5	7	1	3	4	—	8	4	4	4	5	8
ペルージア	2	4	—	3	4	—	5	2	—	—	2	3
ラツィオ地方	1	2	2	—	1	—	1	1	8	11	8	1
ローマ	—	—	—	—	—	—	—	—	7	8	7	—
南部地方	2	7	5	—	6	—	8	9	8	4	8	4
ナポリ	—	—	2	—	5	—	5	6	3	3	5	2

表Ⅱ. 15～6世紀（1450～1550）の著者の出身地および滞在地
Bec, id (p. 251) より

地方名および その主要都市名	出身地			終身的滞在地			長期滞在地			短期滞在地		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
ピエモンテ・リグリア地方	2	2	—	1	1	—	—	—	1	—	—	1
ロンバルディア地方	7	7	5	4	4	—	3	3	3	4	6	6
マントヴァ	—	4	—	—	2	—	—	—	—	—	2	—
ミラノ	3	—	2	3	—	—	—	—	2	3	4	2
パヴィーア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
ヴェネト地方	8	22	13	6	8	8	6	12	16	5	9	8
パドヴァ	—	4	3	—	—	2	3	4	4	3	6	4
トレヴィゾ	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヴェネツィア	7	7	8	6	4	6	3	7	12	2	3	4
ヴェローナ	—	2	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
ヴィチエンツァ	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エミリア・ロマーニャ地方	9	7	10	4	2	4	6	4	5	9	7	6
ボローニャ	2	—	2	—	—	—	—	—	—	3	2	5
フェルラーラ	4	3	3	3	—	2	4	3	4	5	4	—
モデナ	—	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピアチェンツァ	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
トスカーナ地方	21	22	21	13	9	11	6	9	15	5	1	3
アレツォ	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
フィレンツェ	15	13	16	13	7	8	6	7	12	3	—	—
ピストイア	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シエナ	—	5	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—
マルケ地方	3	—	1	—	—	—	2	1	—	—	—	—
ウンブリア地方	1	—	2	—	—	1	—	—	—	1	2	1
ラツィオ地方	4	—	3	3	1	—	12	17	13	7	9	4
ローマ	4	—	2	3	—	—	12	17	13	7	9	4
南部地方	10	6	8	6	4	4	3	3	5	5	2	1
ナポリ	5	—	4	6	—	4	3	—	4	5	2	—

表Ⅲ (Antonelli e Bianchini, Dal clericus al Poeta p.212 より)

13世紀の文学者 (letterati) の出身地

各時期別 (Ⅰ—1200～1230, Ⅱ—1230～1260, Ⅲ—1260～1280, Ⅳ—1280～1300)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	%	対イタリア%
ヴェネト	1	3	4	4	12	16.66	4.81
ロンバルディア	—	9	4	2	15	20.83	6.02
ピエモンテ	1	3	—	1	5	6.94	2.00
リグリア	3	3	9	1	16	22.22	6.42
エミリア・ロマーニア	1	3	11	9	24	33.33	9.63
北イタリア計	6	21	28	17	72	—	—
%	8.33	29.16	38.88	23.61	—	—	—
対イタリア%	2.40	8.43	11.24	6.82	28.91	—	—

トスカーナ	2	7	87	29	125	—	—
%	1.6	5.6	69.6	23.2	—	—	—
対イタリア%	0.80	2.81	34.93	11.64	50.20	—	—

ウンブリア	2	1	2	2	7	36.84	2.81
マルケ	—	1	1	1	3	15.78	1.20
ラツィオ	—	5	2	2	9	47.36	3.61
中部イタリア計	2	7	5	5	19	—	—
%	10.52	36.84	26.31	26.31	—	—	—
対イタリア%	0.80	2.81	2.00	2.00	7.63	—	—

半島南部	3	11	2	1	17	56.66	6.82
シチリア	—	12	—	1	13	43.33	5.22
南イタリア計	3	23	2	2	30	—	—
%	10	76.66	6.66	6.66	—	—	—
対イタリア%	1.20	9.23	0.80	0.80	12.04	—	—

不明	—	—	1	—	1	—	0.40
外国人	—	1	1	—	2	—	0.80
イタリア総計	13	59	124	53	249	—	—
%	5.22	23.69	49.79	21.28	—	—	—